ふるさとへぐり再発見

平群谷の夜明け

1

平群町は、生駒山地と矢田丘陵の間、竜田川の流域を中心として、古来より、平群谷と呼ばれています。

平群の山は、和歌の枕詞に「たたみこも・八重だたみ」と歌われたように、小さな丘が重なる緑深き所でした。

飛鳥時代には、薬猟（くすりがり）（鹿のわか角をとる猟）の場であったように動植物の宝庫でした。

今より数千年前の縄文時代にも狩猟に訪れていた証拠に、石の矢尻が見つかっています。

発掘調査が進めば、当時のキャンプ跡が分かるかも知れません。

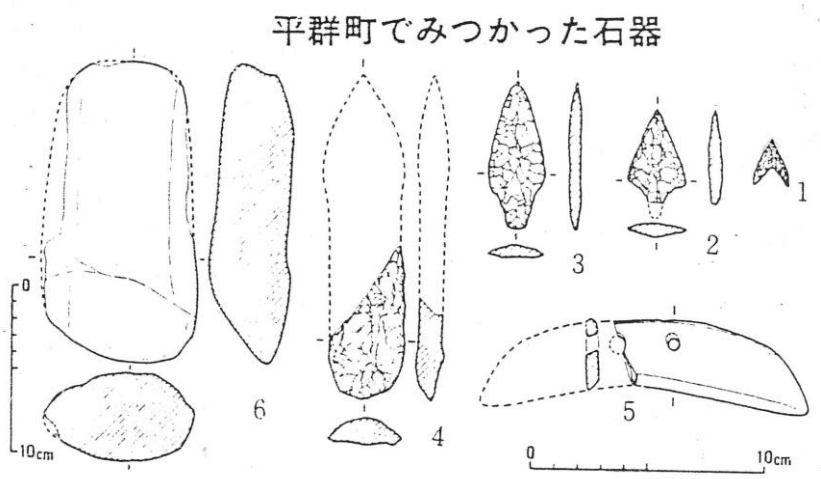
本格的な平群谷の開発が始まるのは、次の弥生時代（紀元前三世紀～紀元三世紀）になってからです。

弥生時代は前・中・後期に大別されますが、現在のところ前期の遺跡は見つかっていません。

中期に下蔵（南小学校付近）椹原東、廿日山（はつかやま）の各遺跡で開発が始まるようです。

縄文時代は不安定な狩猟・採集経済ですが弥生時代には米作りが伝わり、生活も安定してきます。しかし、農耕だけでは足りず、狩猟も行っています。

平群町で見つかった、当時の石器を図にしましたのでご覧ください。

1は梨本東遺跡の発掘調査で出土した縄文時代の石鏃（せきぞく）です。2～6は廿日山遺跡の発掘調査で見つかったもので弥生時代のものです。

2・3は石鏃、4は石槍片、5は米の収穫時、穂刈した石包丁、6は開墾用の石斧です。鉄や銅も伝わっていましたが、貴重品で一般にはまだ利用されませんでした。